

小説 人間の土地

第一部

II

吉田十四雄



人間選書

小説 人間の土地

第一部

II

吉田十四雄



人間選書

小説 人間の土地 第一部Ⅱ

人間選書23

昭和53年11月1日 第1刷発行

著 者 吉 田 十 四 雄

発行所 社団法人 農 山 漁 村 文 化 協 会

郵便番号 107 東京都港区 赤坂7丁目6-1

電話 東京 (585) 1141 (代) 振替東京2-144478

1393-311230-6805

印刷／三和印刷

<検印廃止>

製本／笠原製本

©吉田十四雄1978

定価はカバーに表示

人間の土地

第一部 Ⅱ

目次

第五章 北

へ

.....

5

第六章 わ

だ

ち

.....

37

第七章 新

土

.....

133

第八章 未

然

.....

180

第五章 北へ

一

汽車はほとんど休みなしに走り続けた。

窓から眺めていると、窓外の景色は絶えずぐるぐると回っている。これまで一度も見なかった新しい景色が、恐ろしい早さで目の中に飛びこんで、ぐるぐる回ったかと思うと、あっという間に後へ流れて行く。その後へ、流れたものを見送る暇もなく、次から次へと新しい景色が目の中へ飛び込んで来る。

そのうちに、ぐるぐる回っているのは窓外の景色ではなく、お栄自身であるように思われて来る。自分の体が回っていて止まらない。そうするうちに気分が悪くなってきた。後から後からと生あくびが出て来ていたが、やがて胸がむかついて来た。冷たい汗がじっとりとわいて来る。

耐えきれなくなってお栄は窓にすがった。どうやってこの窓をあけるのであろうか。生暖かいものがぐうっとのど元へつきあげて来た。口を押えながらお栄は夫の肩を片方の手でついた。源三も窓にさわったが、これもどうしてあけるのかわからないようだった。

前の席にかけていた人が、急いで窓をあけてくれた。窓から顔を出すと、お栄は何度も何度も吐いた。冷たい汗が体中に流れて、力という力がみんな抜けてしまいそうであった。

「汽車に酔うたんじゃ、窓をそのままにして顔を冷やしたがええ、それからこれを飲んでみなされ」

と、窓をあけてくれた人は、煙草入れの仄から紙包みを出すと、中から万金丹を取り出してお栄にくれた。押しいたでいてそれを口に含んだが、すぐむかついて来てお栄はまた吐いた。

「汽車は初めてかな。ちょっと降りてひと休みするとおさまるんじゃがのう」

「へえ、ちょっと先を急いどりますんで、早う北海道へ着かんと開墾が間に合いませんのでな」

代って源三が答えた。お栄はたとえ土の上でもいい、

動かないものの上に寝たいと痛切に思ったが、源三のいうのも無理のないことだと思った。先を急いでいるのだ。とにかく先を急いでいるのだ。

「そうか、それではあんた目をつぶって寝なされ、窓か腰かけの背に頭をよせかけてもよし、それから風呂敷包みなどを膝の上に載せて、それに顔をふせてもよし、とにかくなんにも見ずに寝てみなされ、出発前の忙しさで寝不足もあろう。若い体じゃ。押し切れれば酔いにも早うなれようかい」

その親切な人がどんな人か、改めて顔を見て礼をいう余裕もなく、お栄は急いで目をとじた。窓ぎわに顔をよせて、窓から入る風に吹かれて目をとじていると、少し気分がおちついて来た。しかし汽車のとまる時にはまだぐうっと来る。だんだん速力をおとして行き、とんととまるとその反動のようにむかっと来て、すうっと冷や汗が流れて来る。

「寝ることよ。汽車の中では天下ご免さ」

そういわれて、お栄は目をあけてその人に頭を下げた。五十を過ぎているであろうか。木綿の着物ながら、おだやかな顔が笑いを返して来た。思わずお栄もニコッと笑

った。

それからお栄はどれほど眠っただろうか。目がさめた時、窓外はもう暗くなり、車内には淡い燈火がついていた。やっぱり出発前の緊張と睡眠不足がたたっていたのであろうか。ひと眠りした後は、胸の悪さもずっと楽になっていた。お栄は改めて前の人に礼をいった。

「若い体じゃ。一日二日と乗り続けるうちになれてしまうことじやろう。北海道へ行ったらしっかりやりなされ、これも国家のためじゃ」

その人の言葉をひきとるように源三がいった。

「お栄！ 弁当出してくれ。腹がへったわえ」

体を動かすとまだ気分の悪さが残っている。お栄は棚の風呂敷包みをおろして、源三に渡すとすぐ目をつぶった。岐阜の駅を出る時、留二郎らの入れてくれる荷物を、整理する間もなく汽車は発車した。手をふったり、何か叫んでいる人々の姿が、あっとい間に消え去ったし、お栄たちはまた別離の感傷にひたっている暇もなく、押し合いへし合いしている人々の中で、自分たちの荷物を守るのに一生懸命であった。そのうちお栄は気分が悪くなり出し、やっとゆずって貰った座席から動けなくなっ

てしまい、

「この込みあう汽車の中へ、こんな大きな荷物を持ちこむやつがあるかよ。非常識なやつらや」

と、誰かに罵られ、源三が何かいっているのを、他人事のように聞いていた。その荷物はどこに片づけられたのであろうか？

「お栄、お前も食わんか……」

「わし、いらん」

「食わんと元気がつかんぞ、あねやん」

「とつても食えん、それより荷物は片づいたん？」

「うん、なんとかなった」

明日の朝は東京へ着くそうな。ここでは荷物を持って大分歩かねばならんということだ。あの行李と信玄袋を背負ってと思うと、お栄はそれが、これまでのどんなつらかった仕事よりも、もっと耐え難いものと思われた。しかし弁当を食べておかねばと考えるだけで、吐き気がして来るのであった。お栄はそのまま目をとじた。そしてまた眠ってしまった。

夜中に何度か目がさめた。窓をしめ切った車内には、すえたような臭いの空気がこもり、淡い光の中の人々の

顔は黄色くしなびて見えた。しかしその顔々をたしかめることもなく胸元にこみあげて来る吐き気を押えるために、お栄はすぐ目をつぶった。するとまたしばらくの間、うとうとと眠ることができた。

夜が明けた頃、お栄はまた目がさめた。

車内には相変らずむっとする臭いと、温気がこもっていたが、一つ前の席にいた人が窓をあげたので、そこから冷たい風が流れこんで来た。お栄はその冷たい空気を思いきり吸いこんだ。そして吐き出した。一呼吸毎に、胸の中にもやもやしていたものが吐き出されて清々しさを入れかわって行く。やれ、これで助かったという気がした。やっとおちついた気持で窓の外を見ることができた。

汽車は町の中を走っていた。所々に踏切りがあつて、まだねむそうに見える顔が、あつという間に消え去ったり、時には寝巻のまま雨戸をあげかけている、人の家ののぞきこむような所を走りすぎた。

朝早く着くはずだと聞かされていた。もう東京なのかも知れないと気がつく、お栄は急におりることが心配

になつて来た。今度は車内を見回して自分たちの荷物を探した。

その行李は足元の通路に二つおいてあつて、松四郎がその一つに腰をおろし、膝を抱くようにしてねむつていた。もう一つには見知らぬ男が腰をかけていた。弁当を入れた行李と、信玄袋と、弁当を小出しにしたふろしき包みは、上の棚にあがつていた。お栄はのどがかわいていたので、そのふろしき包みをおろし竹筒を出してその中の水を飲んだ。水はすぐ胃の中におさまつて少し元氣が出て来たように思われる。前の人が目をさましていて、「竹筒の水入れとは考えたもんじゃな。わしも一杯所望しよう」

と、一口のみ、

「こりゃうまい。水の中に竹の香いがしみとるわい。うん、わしは夏になるとこの竹筒に酢を入れて腰に下げての、鮎をつつて回つて、獲物の二三匹をその中にさかさまに漬けておく、暑さで酢がわいて、鮎がなんともいせん味になつるとるが……おお、そういえばあんた方は、たしか岐阜で乗つたが、うん、長良川のあゆはうまいのう」

「へえ」

といったきりお栄は顔を赤くした。岐阜にいても、お栄は長良川の鮎を食つたことはなかった。鮎は金持でないと食えない魚だとされていた。

「もう東京でしようか？」

「そう、もう半時間ほどで新橋じゃろう」

男は、帯にまきつけた懐中時計を出してそう答えた。

「へえ、そうですか。あんた。あんた」

お栄は隣にかけてまだ眠っている源三をゆり動かした。「もう新橋やそうですがな」

源三もすぐ帯の間から時計を出して時間を見た。

「六時や。松、松、そろそろおる仕度やぞ」

汽車の中がさわがしくなり、遠くから乗つて来た人たちも、荷物をまとめ出し、なかには大声でおたがいを呼びあつて、人の頭ごしに荷物を受渡しするものもあつた。目をさまして動き出した人々の顔は、夜のあわい光の下で一樣にしなびて見えたものが消え去り、それぞれの個性を取戻していた。なかには、仲間に、訪ねる先はたしかに自信があるのだらうなど、改めて念を押す人もいる。「口もあるし、目も耳もあるわいや。聞いて歩けばなんとかならうというものじゃ」

「なあるほど、そう度胸をきめてしまえば安心や」

「きめるもきめんもお前、ここまで来たらそれより他に手はあるまい」

「そうだ、そうだ。ええこと聞いた」

何かほっとしたものが、車内に流れはじめたのをお柴は感じ、東京という天子様のお膝元に、不安を感じているのはわたいだけではなかったのだと思った。

汽車はいよいよ込みあって来た家々の間を走り続け、人々は自分の荷物を身近にひきつけて、降りる心構えをかためた。やがて新橋の駅に汽車はすべりこんだ。みんな荷物をかついだり背負ったりし、われ先におりようとひしめいた。

「二分や三分早うおりたとて、何ほどのとくがあらうかい。その荷物じゃ、一番後でおりなさい」

前の男の人にそういわれ、彼らは一旦立ち上ったのをまた腰をおろした。彼らに負けないほどの荷物を持っている家族づれもあった。この人たちも北海道へ行くのだから、お柴はそう思いこんで、したしみのこもった目でその人たちを眺めやった。しかし話しかけて見ることは

できなかった。

弁当の行李と、信玄袋との重さは八貫ほどもあらうか。かなりの重さであったが、気がはっていて、昨日の昼からなにも食べていないのに、お柴は日和下駄のままそう重いとも思わずかつぎあげた。

改札口を出たところで、

「上野まで行く道は、交番で聞いて行くことじゃ、気を付けてな」

最後にそう注意すると、この親切な男は人力車をよぶと、それへ乗って走り去った。

源三らの三人もすぐ車夫たちにつかまった。しかし源三は見むきもせずに歩き出した。お柴はあとへついて行きながら、夫は上野とやらへ行く道を知っているのだらうかと、少し心配になったが、果して源三も車夫たちをふりきったと思うと立ち止って、お柴たちをふりかえった。

「一体どっちへ行ったもんかのう。汽車は晩の六時というさけ、時間は十分やが、さてな、西も東もわからんがな」

「兄！ 駐在の旦那に聞けよ！」

「うん！」

源三はしぶしぶ交番を見つけるとそこへ行って、ペコリと腰を折ると上野へ行く道を聞いた。

「上野へ？ その荷物を持ってか、うん」

巡査はあきれたように、彼らの荷物を眺めて聞いた。

北海道への移住だと聞くと、何か心にうたれたものがあつたらしく、少し態度が変わって、

「それにしても歩くのは無理じゃ。人力を頼んでやるが、乗って行ったらどうじゃ」

「へえ！」

源三が気の進まないのを見ると、

「むりにとはいわんぞ、しかし途中で宮城を拝み、楠公の銅像も案内させる。町の説明もさせる。見物をかねて楽をしたらどうじゃ」

源三たちはとうとう人力車へ乗ることになった。この荷物と人間を乗せたら二人分だ。三十銭は貰いたいというのを、二十五銭宛に値切った。

「旦那！ 近頃は田舎のお客さんもりっぱになりやした。駅前でわしらをふって、旦那に交渉させるなんざあ見上げたもんでさあ」

車夫はくやしがつたが、源三はむつとりと車に乗った。

お栄は人力車に乗るのが初めてだった。松四郎も初めてである。源三は二度目か三度目であろう。岐阜の町で初めて乗った時は、帰ってから乗り心地をみんなに話したことがあったと、お栄はちらっと思ひ出した。

「もっと後へもたれて下さいな。どうも調子が悪い」

と、車夫はお栄にいった。自分の足元に荷物をおき、毛布で膝を包まれていたが、下から見上げられるのが恥ずかしくて、お栄はいつの間にか前かがみになってしまふ。乗り手がぐつと後へそりかえっていると、車のバランスがとれて曳きやすいが、乗り手に前へ重心をかけられると、梶棒に重みがかかって大変なのである。お栄はできるだけ体を後へもたせかけたが、目はほとんど車夫のまんじゅう笠と、紺はっぴの背中と、ひらひらと水の底から、絶えず浮きあがって来るような、わらじばきの足の裏をみつめていた。

それでも車夫たちは約束にしたがって、皇居を拜ませてください、楠公の銅像も見せてくれた。町々の説明も、まるで自分のものを自慢するような調子であった。三時間と少しで上野についた。

源三はさもおしそくに、七十五錢を支払い、車夫が去ってから、いかにもいまいましげにつぶやいた。

「米の五、六升もただやられた」

二

源三はそれからもう一度、しぶい顔をしなければならなかった。晩の汽車までにはまだ七時間もあった。この荷物の番人が必要である。

源三は交替で番をしていようと、松四郎に言った。松四郎は三人で東京見物をしたい。これが見初めの見納めになるかも知れないと答えた。それでは荷物をどうする。どこかあずかってくれる所がある。兄！また駐在の旦那に聞いてみなと言った。源三はむすっとしたまま、そんな無駄使いはせんでもええと言った。松四郎が折れて、彼らは待合室の一隅に積みあげた行李の中から弁当を出し、それを食べた。

おびただしい人の群れが絶えずぞろぞろと動いていた。源三たちのように荷物を山と積みあげて、鼻たれ小僧たちが物珍しげに荷物のある場所から離れようとするのを高い声で呼び続けている母親もあれば、汚れた手拭で頬

かぶりした顔を、うつむけたままの亭主のまわりで、これも声を忘れたようにおどおどしている家族もある。

源三がどこで貰って来たのか、竹筒へ補充して来た水を飲んでいて、お栄はふと気がついた。汽車の酔いがまだ残っていて、体が渡し舟に乗っているようにふらふらしていたが、それでも少しおすしが食べられた。群衆の中で物を食べることが恥ずかしくて、お栄は顔をふせていたのだが、そのお栄の手や口の動きを、じっとみつめて動かない子がいた。五つか六つであろるか、ひどく汚れた着物を着ていた。えりも袖も鼻汁で光っている。

わたしにも子供の頃こんな着物を着ていた。けれどもひと中へ出る時には、もう少しましなものを着せて貰えた。この子供はわたいの子供の時より、もっとかわいそうなのかも知れない。そう考えた時、お栄はもうすしをつまみあげていた。

「これ食べな」子供は恥ずかしがりしなかった。すぐ、そのすしを恐ろしい早さで食べてしまった。

いつの間にか、その後にもう一人の子供が来ていた。弟であろるか、顔がよく似ていた。その子も食い入るような目をしていた。お栄はその子にもすしをわけてやっ

た。前の子供が弟のすしに手を出した。物も言わず、その頭をつきとばした女がいた。母親であらう。子供の泣き声で自分もびっくりしたようにおるおるして、お榮に礼を言った。低い声で何を言ったか判らない。

「なんや、なんや、泣くやつがあるかい。さあもつと食いな」

松四郎は竹の皮包みを二つ、母親の手に渡した。母親が自分たちの席にもどると、七、八人の大人や子供がよって行った。それを見ると源三はあわてて弁当をかたづけ、あたふたと立ち上った。「お榮！ 早よ行こ」

駅のとへ出ると、源三はずけずけとお榮に言った。

「どこの馬の骨ともわからんやつらやないか。弁当をやったりして、われはもったいないことを知らん女や」

「へえ」

「へえやあれせん。わしらはこれから、一銭のことでもおしんで稼がんらん身の上や。しっかりせにゃあかんやないか」

「へえ」

「まあ人に施し物をするのは、わしらが成功してからのことや。わかったな」

「へえ」

源三とお榮は間もなく上野公園へあがって行った。

上野の山にも桜が咲きかけていた。まだほとんど咲いていない木の下で、花などどうでもいいというふうで、花見酒を汲んでいるのもあれば、仮装行列でねり歩いているのもあった。お猿になったのが、若い女と見れば「キヤッキヤッ」とひっかくまねをし、女たちをキヤッキヤッと言わせて、自分もひどく嬉しがっているのもいた。

りっぱなお寺があり、大きな建築物があった。しかしそれ以上のことを、源三もお榮も知りたいとは思わなかった。木々となると自分たちの故郷の木々の方が、ほこりもかけられず、もっと伸び伸びと育っていると思われるたし、それにこんなに多い人込みにおされていると、話に聞いたスリもこの中にあるのではないかと、不安にもなって来て、彼らはまた元の方へ戻って来た。

西郷さんの銅像もそばで見るとずいぶん大きかった。

源三は西郷さんのことを少し知っていたので、こんなふうにお榮に話をした。

「この人はなあ、今の天子さまのために天下を取りかえしたえらい人じゃ、尾張さんの本家の徳川さまが負けたのよ」

「へえ、そんなえらい人がこんな着物で……」

「えろうなりや服なんぞどうでもええ。今日来る道で、後押しの人力に乗ったのなぞはまだべえべえの方やろ」

「そうですかな」お栄はちょっと笑った。

今朝がた彼らが人力車に乗っていた時、後押しをつけたらっぱな人力車で行きがちだった官員さんがいた。瘦せた顔の両側へピンと髭がはね上がり、りっぱな服に山高帽をかぶっていた。

車夫が、あれはなんとかというえらい官員さんだ、と彼らに知らせ、おれもせめてあれくらい偉い人のおかかえの車夫になりたい、そうすれば割のあわん仕事をしなくてもすむのにと彼らにあてこすった。お栄はそれをかくべつ氣にとめもしなかったが、源三にして見れば忘れたい皮肉と聞いたのであろう。しかしお栄は、あの官員さんも人間、ここで花見酒にうかれている人々も人間、上野駅で見た子供たちも人間だと、ふと思うと、今度は

急に心が波立って来るのだった。

上野公園の突端に立つと、目の下に上野駅が見え、それからずうっとはるかまで、家々が波をうっていた。

「あそこが浅草寺さま。それから少しずれて大きいのが神谷伝兵衛じゃ。大したもんじゃ。おれも若い時は何糞！ 神谷ぐらいすぐ追いつて見せるいう氣持で稼いだものだ、運がなければどうにもならんとさとしてから、花見酒に酔うてここから見下して、やっと溜飲を下げることにしたわい。アハハハハ」

お栄は太陽に干し固められたような、その人の顔をしばらく眺めていた。もっと東京の町の説明を頼みたいような氣がしたが、だまっていた。

一小时前に駅へ戻ると、彼らは松四郎と交替した。発車は六時だから、どんなことがあっても五時までに帰って来いと念を押した。

松四郎も人ごみを歩くのは苦手だったので、足は自然に上野公園に向っていた。彼はその途中で舌を出した。それから深刻な顔付になった。舌を出したのは源三へで、深刻な表情は弁当をくれてやった連中へであった。

すしを貰った女房とおやじ連中が、源三らがいなくなつてから礼を言いに来た。

その物語があわれであった。

彼らは四国の松山の近くだという。松四郎は地理がすきで、古い地図を買つて来てよく見ていたので、それが愛媛県であることを知ったが、この三軒の移民たちは、北海道庁から来たお役人のいうことを信じて一切をまかせた。そして指定の日に駅へ行つて見るとその役人は来ていなかった。

荷物は出してやったという話だったし、切符は貰つていたが、それ以上のことはわからない。首を長くして駅に三家族で泊りこみ、二日間役人を待った。とうとう役人は顔を見せなかった。

最初はじやま者扱いにした駅員たちも、事情を聞いて心配して警察へ連絡をとってくれた。警察電話の連絡でも大して要領を得なかった。切符を持っているならば、とにかく北海道へ行け、ということであった。

小作地はとうに返してしまつたし、家や家についたものは二東三文に叩かれた。その金を地主や店の連中が取りたてて来た。女房はそれを渡したら大変だと、泣いて

おやじを励ましたが、駐在へ渡すぞという言葉で勝負がついた。警察は彼らにとって鬼よりこわいものであった。こうして、やっと上野駅までたどりついたのであった。荷物はどうなっているかわからない。行く先がどんな所かもわからない。しかしとにかく彼らは後へ戻れないのだ。

畑もなければ家もない。それならばとにかく行つて見ることだ。行く先でこれまでより悪くなることはあるまい。

北海道では土地もくれる。人が足りなくて仕事はいくらでもある。お役人はそう言ってくれた。銭はほんの少し持っている。子供たちだけにでもなにか食べさせたいと頼んでも、涙をこぼしながら、亭主は首をたてにふらないというのであった。握り飯を持って出たのだが、駅に寝とまりしたために、もうなくなつたのだ。

そう聞くと松四郎は行李をあけて、思い切りよく弁当をくれてやった。兄貴がうるさいことだろうと思つたが、なに俺が食うのをひかえると言えばすむことだとも思つた。

この三軒の行く先を聞くと、胴巻を探つて一つの紙片